

アドルフォ・サルコリの音楽活動に関する研究(1) —1911年,1912年のサルコリ関連の資料を中心に—

A Study of Adolfo Sarcoli's Music Activities(1)

—Focusing on Documents Relating to Sarcoli, from 1911 to 1912—

直江学美 (人間科学部こども学科准教授)

Manami NAOE (Faculty of Human Sciences Department of Child Study Associate Professor)

〈要旨〉

筆者はこれまで、1911(明治44)年に来日してから昭和初期にかけて、民間で声楽教育を行ったイタリア人テノール歌手、アドルフォ・サルコリ(1867-1936)の音楽活動を調査してきた。日本における官立等学校を中心とした西洋音楽受容研究は、戦火を逃れた東京音楽学校の資料を元に一通りの調査、研究がなされているが、民間における西洋音楽受容研究はまだ進んでいるとは言えない。

本研究では、日本で書かれたサルコリの資料のうち、来日した年である1911(明治44)年と、翌年1912(明治45)年のものを提示する。これら資料を考察し、サルコリの音楽活動に関する検証と報告を行う。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ、西洋音楽受容、イタリアオペラ

1 はじめに

アドルフォ・サルコリは、1911(明治44)年に来日した。本稿は、日本におけるサルコリ関連の資料うち、1911年と1912年のものをまとめた。これらの資料は、サルコリが来日直後どのような音楽活動を行い、そしてそれらが当時の日本の人々にどう受け入れたのかを物語るものである。

尚、表記は出来る限り記載のままとし、解読不能の文字を■とする。内容が多岐に渡るものに関しては、サルコリに関する部分に下線を加える。

2 サルコリ関連の新聞、雑誌記事より

2-1 1911(明治44)年

筆者が2016年7月までに調査した範囲では、最初にサルコリの記事が掲載された日本の新聞記事は、1911年11月25日付けの『東京日日新聞』4面のものである。

「伊太利音楽家の試演」のタイトルで「今度漫遊の途次吾国に立寄られた伊太利のオペラ唱歌者サルコリ氏の獨唱が二十三日の午後一時から上野の音楽學校で催され同時に秋期大演奏會の下稽古もあると聞きドンナものかと聴きに行った▲サルコリ氏は流石優艶なメロデーに富んだ土地に育つた丈あつて其動作如何にも歌劇の舞臺に適した人で勿論唱歌者としては第二流の人ではあるが斯様音量の

豊富なものを此學校で聴くは稀故生徒達はニコニコで耳を聳て居つたが學校の建物が悪いせいか何んだか唱ひにくそうであつた▲歌は伊太利のオペラ物でポンシエリ氏作のギラコンダ外二曲、最後にヴェルヂ氏作りゴレトの三幕目カンゾネの曲は素人受けのするもの故大喝采であつた▲此日教授ユンケル氏のご愛嬌にウエーベル氏のピアノコンセルトを指揮して下稽古を聴かして呉れたが就中久野ひさ子のピアノの演奏振りは活氣に充ちて此調子で行けば是が來たるべき大演奏會の呼び物となるのであろうとの評判▲序にいつて置くが此日此練習振りを見に来た人が大分あつたが何故か會場から一時退去を命じた爲物議を起こしたは甚だ失態であつた(F生)」と書かれている⁽¹⁾(『東京日日新聞』1911年11月25日)。

この記事では、サルコリが「第二流の人」と紹介されている。「斯様音量の豊富なものを此學校で聴くは稀」との記述から、音量が大きく、サルコリのような演奏家の歌声を当時の東京音楽學校で聴ける事は稀であったことが伺える。

東京日日新聞には、その後、12月2日(土)4面、12月11日(月)4面、12月14日(木)4面、12月19日(火)4面、12月19日(火)4面、12月30日(土)3面、12月31日(日)3面にサルコリの名前が見られる。記事としての掲載は12月31日付

けの新聞のみで、その他は「演藝」や「遊覧案内」と題された催し物の広告である。催しとは、1911年12月15日より帝国劇場で行われた〈カヴァレリア・ルスチカーナ〉であった。

12月31日(土)付け記事のタイトルは「帝劇の女優」で、書いたのは幸堂得知という人物である。内容を以下に記す。

「先頃或座敷で梅幸に會た時、歳末は女優劇で新年早々歌舞伎狂言を出しますと言たから、女優劇は新年松の内に是非見せたいもの、歳末から新年へ打通したらよからうにと噂したのが 劇場の都合か恰度符合して、十五日開場四十五年一月三日まで打通す事に成たは至極結構である、狂言も時代劇、西洋舞踏、新演劇、歌劇、喜劇、所作事と、十人十色好次第で、一軒占の繁昌は目出たい吉兆、先兒ヶ淵は江の島の飾道具がいかにも立派、筋は方丈が白菊丸の他國へ去るを惜しむといふ意味が少し障るとやらで、只都が見たいの一點張は嚙演にくい事であらう、夫に又龍女は彼が笛の名手を惜んで海底へ伴込むのはあまり 淡白な落命ではあるまいか、殊に龍女がノコノコと岩の奥へ降りて行と、白菊も共に付て行くのは随分寂しいやうに思ふが、作者はここを見せ場として居るのであらう、けれども龍女辨手が 幻燈で岩に寫るのは感服ができない、同じ事なら電氣の 作用で自身の姿を現はし白菊を招き導く白菊は又狂体の様でいさましい入水にしたら 後が一層沈んでよくあるまいか、舞踏は綺麗でおもしろいおもしろい 雪の夜は十餘年前の新演劇を見るやうな心持であつた、歌劇はザルコリーの爛々たる音聲は誰にも真似の出來ぬ事、奴戻駕は古い歌舞伎の所作毎是許りでは寂しいといふので前に仲居五人が翁團扇を持ての手踊りは花やかでよかつた、併し■面が廓外の背景だけ螢狩にあぶれて 歸るやうでもあつた、とはいふものゝ仕種は夫々活氣があつて皆よかつた、兒ヶ淵では宗之助の白菊、好く演て居たが傍の兒が揃つて小粒故か兒仲間の伯父さんのやうにも見えた、傳次郎の小源太は息組が最もよし、藤澤の自体は見預りの留守居僧、嘉久子の姉信夫、千枝子の娘櫻子、いづれも尋當の出來、徳子の龍女は何所か今少し凄味が欲かつた、雪の夜では藤澤の村松、黒布で顔を包み奥座敷へ忍び込むのは、充分殺意のあるやうに見えたがさうでもなく、宮下に北島遺族を救ふ異見を延べ、聞入れぬより争ひとなつて突倒され、思はず床に飾ある刀に手が触れ殺すのは謀殺 でもないやうである、して見ると黒布覆面はわるいやうだ、千臣の敬三は平凡、浪子の姉娘敏子は骨折が見えた、目出子の妹娘駒子も車輪にてよし、喜劇女優には先相當菊枝の女義太夫、大阪辯のチャラチャラは大出來、濱子の狂女もよし、浪子の乳母は氣の毒な役、小春の令嬢、勝代の母は、品格を失はずをかくしこなして居る所がよかつた、奴戻駕

は■幕時代の坂東派藤川派が、大名方へ召されて勤めし御狂言師の如し、女優の藝は興行毎に進むやうであるけれども油断が何よりの大敵、此奴に見込まれず一心に修行すれば五年にして白黒を分ち、十年にして名人巧手を出すべし、必ず藝を怠る事勿れ²⁾」

幸堂得知という人物は、本名を高橋利平と言い、1843(天保14)年に生まれ1913(大正2)年に亡くなった劇評家である。「帝劇の女優」の記事は、劇に関しては比較的細かく書いてあるが、サルコリに関する記述は「歌劇はザルコリーの爛々たる音聲は誰にも真似の出來ぬ事」だけである。しかし、劇評家の高橋利平にとってサルコリが「誰にも真似の出來ぬ」声の持ち主として印象づけられていたことが分かる(同上12月31日)。

東京日日新聞に記載されている〈カヴァレリア・ルスチカーナ〉の告知記事と広告は以下の通りである。

『▲帝劇の伊太利歌劇 本月中旬より帝劇にては伊太利男聲高音部オペラ歌唱師アルフォンゾサルコリ氏を招雇し伊太利歌劇中の傑作「カワレリヤ」一幕を演ぜしむべく決定し柴田女史はサントツツア役に扮すべしと³⁾』(同上12月2日)

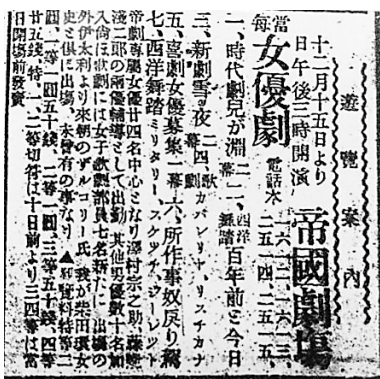
『演芸▲帝劇 文楽一座は十三日にて閉場十五日より座附の宗之助に女優及び新派の藤澤又はイタリー人のサルコリー氏、柴田環女史のオペラにて開場出し物は一番目岡本綺堂氏の新作「兒ヶ淵」二幕「スイングダンス」佐藤紅緑氏新作「雪の夜」二幕「オペラ」駿河町人新作喜劇「女優募集」上り「戻り駕」(家元文字太夫出勤)「軍隊行列ダンス」等なり⁴⁾』(同上12月11日)

『演芸▲帝劇の女優劇 十五日午後四時より開場の狂言及役割は ▲第一「兒ヶ淵」姉信夫(嘉久子)長者の娘櫻子(■子)花見の女房(花子、龍子)同娘(延子、小春、早苗、静枝)濱女浪路(濱子)同藝汐(喜美代)兒春君(由次郎)同市若(銀杏)同乙若(幸雄)供の男(澤右衛門)花見の職人(銚次郎)島人(宗右衛門)甥小源太(傳次郎)自体藏主(藤澤)白菊丸(宗之助) ▲第二西洋舞踏「百年前と今日」ガール(房子、早苗、龜代子、小春、花子、延子、かね子、富美子)ボーイ(萬子、菊枝、勝代、壽美代)「辯子」一▲第三「雪の夜」姉敏子(浪子)妹駒子(日出子)宮下富士子(律子)未亡人友子(菊枝)北島文子(徳子)友達娘かめ子(かね子)同せい子(龜代子)同しづ子(静枝)長屋女房(勝代、龍子、蝶子)下女おつた(萬子)揭示(田井)同(吉野)巡查部長(傳次郎)八百屋(宗右衛門)書生深谷(森田)家扶金谷(國之助)養子敬三(千臣)宮下萬藏(銚次郎)村松重平(藤澤) ▲第四劇「カバレリヤ、ルースチカーナ」農夫トリード(ザルコリー)娘サントツツア(柴田環子)馬車屋女房(かね子)教會參詣者(花子、浦路、津留、千草、磯代、歌子、園子、美千代) ▲第

五喜劇「女優募集」座長（宗之助）作者（國之助）頭取（鈺次郎）洋服を着たる男（千臣）女に化けたる男（傳次郎）大道具方（宗右衛門）同（澤右衛門）女學生目白高子（律子）藝妓鞍馬屋てんぐ（嘉久子）看護婦山井直（壽美代）女教師高尾菊子（房子）妹まひ子（千枝子）女義太夫竹本お傳（河村菊枝）女狂吳葉（濱子）狂女の乳母浪子令嬢の母（勝代）令嬢（小春）囃子の女（花子、龍子）▲第六所作事「戻り駕」駕かきお鶴（律子）同お藤（徳子）仲居（嘉久子、早苗、延子、浪子、千枝子）奴哨平（宗之助）▲第七西洋舞踏「ミリタリースケッチ、ジー、レット」キャプテン（小春）レフテナント（龜代子）ソルヂヤ（蝶子、かね子、富美子、静枝、蔦子、龍子、愛子、花子、延子、濱子、早苗、三千代、千草、津瑠、浦路、國子、磯代、勝代、嘉美代、菊枝、房子）なりと⁽⁵⁾（同上12月14日）

『演藝▲帝劇の巻開き時間 同劇場は年末にもめげぬ大入續きにて忘年会観劇の団体申込み多く幕開き時間は音楽開始（午後四時）兒ヶ淵（四時十五分）ダンス（五時四十分）雪の夜（六時廿三分）オペラ（八時十分）女優募集（八時卅五分）奴戻駕（九時五十五分）ダンス（十時廿分、同卅分打出し）⁽⁶⁾』（同12月19日）

「當十二月十五日より 毎日午後四時開演 帝国劇場 女優劇 電話本 一六一二、一六一三、二五一四、二五一五、一、時代劇兒ヶ淵二幕 二、西洋舞踏百年前と今日 三、新劇雪の夜二幕 四、歌劇カバレリヤ、ルスチカナ 五、喜劇女優募集一幕 六、所作事奴戻り駕 七、西洋舞踏ミリタリー、スケッチ、ジーレット、帝劇専属女優廿四名中心となり澤村宗之助、藤澤淺次郎の兩優輔導として出勤 其他男優數十名加入尚ほ歌劇には女子歌劇部員七名新たに登場の外伊太利より來朝のザルコリー氏 我が柴田環女史と供に登場、未曾有の事なり▲観覧料特等二圓、一、一等一圓五十錢、二等一圓、三等五十錢、四等廿五錢、特、一、二等切符は十日前より三四等は當日開場前發賣⁽⁷⁾⁽⁸⁾」（同上12月19日、12月30日、12月31日）（写真1）



（写真1：遊覧案内欄の「帝国劇場」劇場案内⁽⁸⁾）

2-2 帝国劇場での〈カヴァレリア・ルスチカーナ〉

前記の新聞記事によると、サルコリが出演した〈カヴァレリア・ルスチカーナ〉は帝国劇場にて1911（明治44）年12月15日より行われた。帝国劇場のパンフレット⁽⁹⁾は、表紙がカラーで、記事のタイトルと内容は次のようになっている。（写真2）



（写真2：「十二月狂言絵本筋書 帝国劇場」）

1頁、「歌劇 カバレリア、ルスチカナ 歌詞 定價金五錢」「帝国劇場案内 定價金五錢」2頁、女優の紹介、3頁、白紙、4頁、白木屋広告、5頁、「忘年会と帝劇」、6、7頁、第一演目「兒ヶ淵」出演者とイメージ絵とあらすじ、8、9頁、第二演目「百年前と今日」出演者と説明とイメージ絵と歌詞、第三演目「雪の夜」出演者とイメージ絵とあらすじ、10、11頁、第4演目「カバレリア、ルスチカナ」出演者（管弦楽部員も含む）とイメージ絵とあらすじ、12、13頁、第五演目「女優募集」出演者とイメージ絵とあらすじ、14頁、花月樓広告、15頁、大西白牡丹広告、16、17、18頁、第六「奴戻り駕」第七演目「ミリタリー、スケッチ、ゼ、レッド」出演者（長唄も含む）とイメージ絵とあらすじと、帝国劇場の座席料と奥付、19頁、座席表、20頁、湖月樓広告、21頁、金龍館、福和館広告、裏表紙、御園白粉広告。

1頁目は、半面を使い〈カバレリア・ルスチカーナ〉の内容を知るために歌詞を買うよう呼びかけられている。内容は「カバレリア、ルスチカナは伊太利の音楽家マスカーニの初めて名を爲したる榮譽の歌劇にして、今回當劇場に於いて伊太利の聲樂家ザルコリー氏と、本邦の聲樂家柴田環女史とに依りて唱和さる。歐洲の都市に演ぜらるゝ歌劇と雖も多く此上に出づるものあらざるべし。本書は右歌劇の大體の結構を敘述して、今回演奏の部分を盡く邦語に譯したるものなり。歌章の意味を知曉せざれば歌曲を樂む趣味蓋し完きを得ざらん。開幕前に必ず御閱覧を給へ。」となっている⁽⁹⁾（「十二月狂言絵本筋書 帝国劇場」1911：1）。

〈カヴァレリア・ルスチカーナ〉の記載がある10、11頁

を見ると「出演者は、農夫トリードウ：ザルコリー、娘サンツツザ：柴田環子、馬車屋女房ローラ：音羽かね子、教會参詣者：福原花子、上山浦路、川窪津留、夢野千種、河合磯代、中山歌子、大和田園子、澤美千代」の11名である。また、帝國劇場管絃楽部員として、「樂長、竹内平吉、ヴァイオリン：萩田十八三、小田越男、吉田盛孝、山崎榮次郎、小松三樹三、田中平三、蒲池鋼藏、ヴィオラ：絆川藤喜知、栗本義精、蜷子正純、ソエロ：内藤縄常吉、ツエロ：小林武彦、バス：内藤彦太郎、荒木茂次郎、フルート：横山國太郎、オボエ：八尾五郎、クラリネット：横須賀薫三、奥山一雄、トロンバット：吉田民雄、ホルン：中村權三、トロンボーン：木村仙吾、ドラム：渡邊金治」らの名前が書かれていることから、管絃楽演奏であったことが分かる。筋書きによると『今回上場せしはサンツツザがトリードウに嫉妬心を述べ反て其身を棄るるに至る人間の感情が恐しき計り高潮に達せる件を選みたるものにして幕開と教會へ赴く参詣者大勢出來たり合唱し打連れて奥に入るとサンツツザ出來りてトリードウを待合せローラとの仲を擧げ恨みの數々を述べローラ登場し菖蒲の歌を謡ひトリードウを教會に誘ひ行んとすサンツツザと當て擦りを云ひ之を去らしむトリードウ怒て妻を叱し其後を追はんとするにサンツツザ引留て放たず之より男聲女聲二部合唱となりサンツツザは夫を愛する妻を捨つる心かと涙を振りオーケストラは其苦悶を奏すトリードウ之に答へて歌ひ「行けと云ふに分からぬか幾度も同じ事を繰返させる懊い奴!」と無情く振拂ふ。サン「如何に貴方が怒つても其怒は恐れませぬ、アア汝偽善者よ幸ある復活祭の此日汝をば呪んとす」と音樂急調となり益々嫉妬の焰を燃す模様にて幕⁹⁾』と書かれている。教會に人々が入って行くシーンからサントウツツアとトゥリッドウの二重唱まで、また、母親役がいないことから母親のシーンもカットしての上演であったと思われる(同上11-12)。

2-3 1912(明治45, 大正元)年

1912年に入ると、サルコリは音楽雑誌に取り上げられるようになる。

まず、1912年1月発行の『音楽界』に、サルコリの名前が見られる。記事は「内外樂纂」の「歌劇カバレリ、アルスチカナに就て」というタイトルで、幸陽生(在慶應義塾大學)によって書かれた。冒頭に「今度伊太利の唱歌師アドルフォ・ザルコリ氏の來朝を機とし、帝國劇場の十二月十五日からの興行に此のカバレリアルスチカナの一節を上場する事になり、まるで幕の内と番附のドン尻位の差のある柴田環女史及女優月岡兼子それにザルコリ氏と云ふ顔觸で管絃楽衣装附で演じると云ふのは四十四年の歳末に花を粧ふもので斯界の前途の爲めに大に喜ぶべきことである。

それで一寸折に臨んで此の劇の筋を極く簡単に御話する事にした」とサルコリをはじめ出演者の事が書かれ、その後は筋書が詳細に記されている¹⁰⁾。筆者の幸陽生は、妹尾幸陽である(『音楽界』1912.1:41-43)。

「樂況」の演奏情報欄には、サルコリが出演した演奏会の内容が記されている。

「東京フィールハーモニー會大演奏會は十二月六日午後八時より帝國劇場に開催され閑院大蔭宮殿下同妃殿下の御臨場あり。音樂會が此の如き大劇場に催され而も満員の盛況なりしは大に喜ぶべき事なり。其の演奏の氣乗せる事亦前代未聞なり。人は只だ樂に酔ふ。曲目左の如し¹¹⁾」

このコンサートでサルコリは、歌劇〈ジョコンダ〉〈蝶々夫人〉〈トスカ〉〈リゴレット〉のアリアを、また、レオンカヴァッロの〈マッティナータ〉を演奏している。この「東京フィールハーモニー會大演奏會」は、満員の盛況で成功を収めたようであるが、サルコリの出番は2度あり、コンサートの「トリ」を務めている(同上52-53)。

2月に発行された『音楽界』の「樂潮」欄には、乙骨三郎が「四十四年の音楽界」のタイトルで1911年の日本の音楽界を振り返っている。2頁弱の文章の中に「正月に來たマダムカルヴェエが病氣の爲め歸つたのは遺憾であるが、清國の動亂が圖らずセニョール、サルコリーの美聲を東京に引きよせたのは聲樂研究者にとつて少からず参考となることであろう¹²⁾」との記述があり、サルコリの來日が日本の声樂教育界にとって「参考になる」と形容されている。その他、サルコリの名前は出ていないものの、サルコリが関係していた〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉の記述もあり、乙骨が振り返る明治44年の音楽界にサルコリの存在が大きいことが分かる(『音楽界』1912.2:64-65)。

同じ号の「樂報」欄には、サルコリの事が多く書かれている。「帝劇とザルコリ氏と柴田女史と内輪話をつつくるめて話すと、柴田女史の近頃歌劇に對する熱心は非常なもので、お自身計りでなく劇場の連中を一週に三度も特別に家によんで教授をする。で何でも音量を増加せねばいかぬと劇場の稽古は撥聲計りやつて居るとは目出度し目出度し。

處で男生徒のユンケル老翁は生徒共一様に他日藝術家たるべく豫期或は自覺して居ないので困るとコボスと云ふ千態満狀である。此間のカバレリアの歌劇の舞臺でザルコリー氏の注意は大したもので觀客には分らぬ様に、オーケストラを目で指揮したり、柴田さんの出の處を唱つてやつたり、音羽兼子の歌の出の處を指で誘つてたり、丸で自動車運轉する様で而も其上に余りがあると云ふ中々ドエライ始末ださうな。音羽兼子と云へば近來メツキ腕をあげ始めた。大に他日の發展を望むのである、好い加減にして置かうかね¹³⁾」(『音楽界』1912.2:77-78)

記事の中で、柴田環が近頃発声を中心に弟子に熱心な稽古を行っているという記事があることに注目したい。サルコリの弟子達によると「サルコリ先生は発声を中心に稽古を行っていた。当時は東京音楽学校を中心に、発声より歌を歌えるようにする事に力が注がれていたので、サルコリ先生は、日本の声楽界の事を憂いていた」と言う¹⁴⁾ (1999丸山徳子)。このことを鑑みると、サルコリの来日により、サルコリに指導を受けた柴田環が、サルコリの影響で発声の大切さを感じ、自身の弟子達にも発声を中心に稽古をつけるようになったことが推測される。同じ文章の他の部分からも、サルコリが〈カバレリア・ルスティカーナ〉の舞台で中心的な役割を果たしていたことが伺える内容となっている。

3月発行の「音楽界」の巻頭は、サルコリの写真が2枚掲載された。(写真3)(写真4)



(写真3:「アドルフ・サルコリー氏」)¹⁵⁾



(写真4:オペラの様子)¹⁶⁾

同じ号の「内外彙報」には次の記述がみられる。

『サ氏と演奏 昨今來朝せし帝劇にて柴田女史とカバレリア・ルスチカナを演じたる伊國聲樂大家アドルフ・サルコリー氏は帝国劇場の懇請に依り數ヶ月滞京することとなり、次回はマダム・バタフライを上場する筈、亦二月廿七

日横濱外人團の招聘にてゲーテ座に於てカバレリア・ルスチカナを演ずべしと、カルース等世界的聲樂家の産地たる伊太利有數の名手なれば此機を利用して獨唱懇望者多きも何分帝劇に出演は一夜一千圓との話しに驚き躊躇せるもの尠からざる由¹⁷⁾「サ氏の樂聲教授 サルコリー氏は伊太利大使其他諸名士の勸告に依り滞留中は其餘暇を以て内外人廿名を限り聲樂教授を去十五日より開始せり、受教者在留外人中の美聲家ルース嬢、柴田環、清水金太郎氏等内外知名の聲樂家あり、高級なる藝術として歐州に尊重せらる、此伊太利のオペラチックエキスペリション或は發聲法等歌劇聲樂研究者には無上の好機會なり演奏、教授等は松本樂器店編輯主任加川琴仙氏に申し込まるべし¹⁸⁾ (『音楽界』1912.3:58-59)

この記事によると、サルコリは、短い滞在予定だったものを、帝国劇場の懇請により変更し、滞在を延長したとされている。また、「イタリアの有数の名士」と評されており、その出演料は一夜千円との記載がある。『値段史年表』¹⁹⁾によると、明治45年の大学の一年間の授業料は、慶応大学が48円、早稲田大学が50円であった(『値段史年表』1988:116)。高等文官試験に合格した公務員の初任給(基本給)は、明治44年時点では55円である(同上67)。これらを鑑みると、一夜千円という数字は非現実的な感じも受ける。同記事からは、サルコリは、明治45年3月には既に声楽の教授活動も始めていたことが分かる。イタリア大使やその他名士の勧めでレッスンを行う事を決め、松本樂器の旗ふりで、三浦環、ルース、志水金太郎などに稽古をつけていたようである。また、サルコリの存在が「歌劇聲樂研究者には無上の好機會」と形容されている。

同じ号の「新刊紹介」には「サルコリー氏繪葉書」のタイトルで「來朝中の伊太利大聲樂家サルコリー氏が歌劇カバレリア、ルスチカナ登場扮装寫眞にして一はサ氏の扮装一は柴田環女史と俱に同歌劇中最も感情の高潮したる二部合唱中の扮装寫眞なれば好樂家の通信用として嶄新なるものなり(二枚一組六錢送料二錢、東京銀座松本樂器店)」との説明がある。サルコリの繪葉書も作成されていたようである²⁰⁾ (『音楽界』1912.3:61)。

続いて、4月号の「聞いた風」に興味深い記事が掲載されている。『帝劇の四月興行には歌劇「釈迦八相記」てなものが上場されるげな。二月が謡曲から「熊野」を取つたから、今度は純振事から歌劇の材を取るといふ段取りになつたのであらふ。それからは再びザルコリーが登場すると噂である。一体ザルコリーの俳優としての戸籍は上海である。けれども、例の革命騒でオペラでもなからふと、ブラリと東京來たのが縁になり、今以て帶京しある譯だ。是まで世界一といふ冠詞を冠ぶつたくせ喰せ者が随分やつて來た。けれども、ザルコリーだけは喰せ者ではないらし

い。²¹⁾」

サルコリは、これまでの外国人演奏家とは違い、日本に受け入れられている事が分かる内容である。続く記述でも「彼は欧巴里の舞台臺で屢々第一流の俳優の相手をしてをる。西洋のオペラの番附を見ても彼は確に名題俳優である事が解る。日本でいふなら六代目が吉吉衛門、少なくとも榮三郎位な地位は持つてをるに違ひない。彼は至つて無邪氣な青年であるが、さすがは職業柄だけあつて、彼の平生坐附隊は少しも舞臺上の仕草と變らないので、彼に接すると頗る快感を覺ゆると或人は褒めて居た²²⁾」との言葉が続く、サルコリの能力が高く評価されている。その後イタリアの事、イタリア人の良い声が紹介され「氣毒ながら上野の樂堂などではとてもあんな聲は聴かれなるとは又或通人の話しである。」との言葉で終わっている（『音楽界』1912.4:57）。「上野の樂堂」とは東京音楽学校の事を指しており、日本で当時言われていた、「イタリア系」と「ドイツ系」の違いを暗に揶揄している。

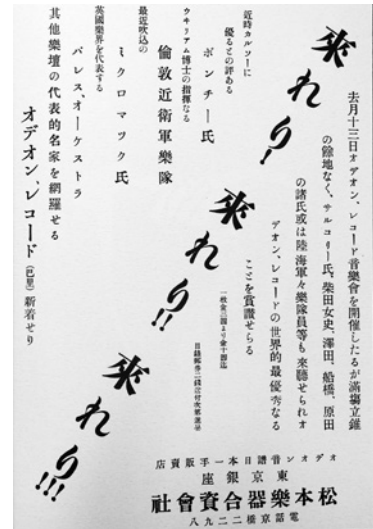
「樂況」の「歌劇聲樂大音樂會」にもサルコリの事が書かれている。「目下滯京中の伊太利聲樂大家ザルコリー氏は伊國大使其他外交團の贊助と柴田環女史帝劇男女コーラス及びトドロウイチ夫人等の協賛出演にて去る廿八日午後八時帝國ホテルに於て歌劇聲樂大音樂會を開催せり曲目中ビゼーのカルメン、プッチニーのトスカ及びマダム、バタフライ、ヴェルゲーのアイダ、グルツクのオルフォイス其他大歌劇曲の獨唱合唱等あればオペラ熱の漸く盛んならんとする本邦に於て世界の歌劇源泉地たる伊太利聲樂家の演奏を聴くは専門家は勿論一般の注目すべきことなり。翌九日は横濱ゲーテ座に於て同氏等は歌劇カバレリア、ルスチカナを演じたりと²³⁾」（同上67）。イタリアの事が、歌劇の「源泉地」と表現されている。

同巻72頁の「樂報」にもサルコリの事が記載されている。「ザルコリ氏の帝劇出演 日本風歌劇マダムバタフライ

目下滯京中の伊太利有名のヴァカリストたるザルコリ氏は近々帝國劇場に於てミカド劇と共に英國に於ける日本風歌劇にの名曲と稱せられるるマダムバタフライを上場せん計畫にて昨今其準備中なり同劇は先に伏見宮殿下英國御滯在中出演して大好評を博したるものにて女主人公は横濱ドラマック、クラブの花形役者ルース嬢若しくは柴田環女史の何れかが勤むる事となるべしと因にザルコリ氏は近來麹町有樂町に假寓をとし柴田環妹尾幸次郎其他内外音樂家にオペラチック、エツキスプレツシオンを教授中なり²³⁾」（同上72）

『音楽界』5月号に掲載された「松本樂器合資會社」の広告²⁴⁾には「サルコリー氏、柴田女史、澤田、船橋、原田の諸氏或は陸海軍々樂隊員等も來聽せられ、オデオン、レコードの世界的優秀なることを賞賛せらる」とサルコリの

名前が、日本人と並んでいる。広告にサルコリの名前が使われているということは、音楽界に受け入れられていることの表れであろう²⁴⁾（『音楽界』1912.5:巻頭）。（写真5）



（写真5：巻頭に掲載された広告）²⁴⁾

同じ号と、次の6月号「樂況」の欄にあるコンサートのプログラムに、サルコリの名前が見られるので、以下にコンサート内容を記す。

「聲樂音樂會 音樂名家サルコリー氏の主催にて三月廿八日夜八時半より帝國ホテルに聲樂大會を開く入場券は三圓二圓一圓にて銀座松本樂器店の發賣²⁵⁾」（同上48-49）

『中央樂況』○東京聯合和洋音樂演奏大會 横濱二葉音樂會長石原重雄氏は和洋音樂大家聯合大演奏會を苦心計畫中の處今回東京公私音樂學校教授其他音樂教育會始め音樂諸團體の贊助を得五月五六兩日午後二時より歌舞伎座に於て興行し出演者は京濱間の和洋音樂一流の大家を網羅し曲目は最も著名なるものを選びたれば斯界破天荒の壯舉と云ふも敢て過言にあらず演奏曲目は

第一日（五月五日之分）第一部（第一幕）

一、三部合奏 ムーブメント ホフマン作 ピアノ ロイテル氏、ヴァイオリン ユンケル氏、セロ マイステル氏 二、ソプラノ獨唱 コーン、エ、バツロ ドニデツテイ作 柴田環女史、三、ヴァイオリン獨唱 窪兼雅氏 マヅルカ ザルズイッチ作、四、セロ獨奏 マイステル氏 甲、アンダンテ ゴルターマン作 乙、タランテラ ポツパー作、五、テナー獨唱 ザルコリー氏 甲、マダム、バタフライ 乙、リゴレット ヴエルデー作、六、ヴァイオリン獨奏 ユンケル氏 甲、アンダンテ、レリヂオソトータ作 乙、ゴンドリエラ リース作、七、ピアノ獨彈 ロイテル氏 甲、ヴァルス、ミニオン シュツツ作 乙、シャツテン、タンツ 八、二人連唱 ザルコリー氏 柴田環女史 ボヘメ プッチニー作、第二部（第二幕）歐洲管絃樂 東京オーケストラ 甲、コロネーション 乙、

フラ、ディアボロ オーベル作、一〇、三曲合奏 松竹梅 (舞臺廻ル) 箏 今井慶松 同 門人 飯田松蓮 三味線 山室百代子 尺八 荒木古童、一一、於伽 歌劇 素歌合戦 (舞臺廻ル) ドンブラコ (桃太郎) 北村季晴氏 北村初子夫人 外数名、一二、哥沢 佳吉 夕立 初紫 綱は上意 哥沢芝美彌 哥沢芝金 三味線 哥沢清子 (第三幕) 一三、歌 (ママ) 州管絃楽 (舞臺廻ル) 東京オーケストラ ゼ、メリーウキドー フランツレー作、一四、清元 (舞臺廻ル) 清元延壽太夫 清元家内太夫 清元喜久太夫 三味線 清元梅吉 上調子 清元吉太郎、第三部 (第四幕) 一五、長唄 外記節石橋、長唄 富士田音藏、中村兵藏、芳村伊四郎、三絃 杵屋巳太郎、杵屋長三郎、杵屋六十郎、長唄 芳村孝次郎、松島庄十朗、吉住小扇次、三絃 杵屋榮藏、杵屋辰三郎、杵屋勝四郎、鳴物 菊川芳次郎、望月長左久、六郷新十郎、福原鶴三郎、望月長四郎、六合新三郎、一六、常磐津 (舞臺廻ル) 梅川忠兵衛 二の口村の段、常磐津 文字太夫、都太夫、彌生太夫、三味線 常磐津 文字兵衛、上調子 常磐津 和歌吉 (第五幕) 一七、踊 子寶 尾上菊五郎、城東三津五郎、常磐津連中 (第六幕) 一八、新内 道中膝栗毛 市子口寄せの段、富士松加賀太夫、吾妻路宮太夫 (第七幕) 一九、踊 (和洋樂器合奏) 長唄吾妻八景、藤間政彌、藤間龍、長唄連中、囃子連中、横浜二葉音樂會員十数名²⁶⁾ (『音楽界』1912.6: 63)

「東京聯合和洋音樂演奏大會」は、1912 (明治45) 年5月5日、6日の二日間開催された。演奏会の題名通り、演目には邦楽と洋楽が並ぶ。第一部は西洋音楽のプログラムで、8つのプログラムが演奏され、出演者は6名と1つのオーケストラ団体であった。サルコリは第1日目の第1部5番にテナー独唱を、8番の演目として三浦環との「二人連唱」を行っている。演奏内容は、ソロで〈マダムバタフライ〉と〈リゴレット〉のアリアを歌い、三浦環とは、〈ラ・ボエーム〉の二重唱を行った。西洋音楽に関する他の出演者は、ヴェルクマイスター (チェロ)、ユンケル (ヴァイオリン)、ロイテル (ピアノ) といった、東京音楽学校の教授陣の名前が続く。

6月号の68頁から69頁にかけて書かれた「樂報」の「帝劇事情」には「聴く所に依れば四月の廿九日には新來のユヴェナ夫人柴田環女史サルコリー氏等にてビゼーのカルメン劇の一節が催されんとせしも珠盤玉の関係より是も實現されざりき。而して吾人が大に希望せしファウスト、トラヴィアタ、マダム・バタフライ等の劇も名を聴く計りにて暗中に葬られ去られしは帝劇の眞意のなき良き例と云はざる可らず²⁷⁾」との情報も書かれており、サルコリや柴田環らが〈カルメン〉の上演が企画されていたが、実現しなかったことが分かる (同上68-69)。

2-4 サルコリ、突然の帰国

1912 (明治45) 年6月16日付けの東京日日新聞にサルコリが日本を離れるとの記事が掲載された。タイトルは『聲樂家サルコリー氏去らん 我國の獨逸樂風萬能が不快か』であった²⁸⁾。

「去る四月以來在留し、マダム、バラフライ其他の名曲を獨唱し高評嘖々たりし、伊太利聲樂家サルコリー氏は來朝以來深く我風物を愛し永住して日本樂界開拓に努力せん希望なりし所何故か突然歸國の意を洩したるより東京音樂學校教授連其他の好樂家は非常に之を惜み目下極力氏に歸國を断念せしめんと運動中なるか既に氏の決意堅く到底意を懾へざるべしとこれ察するに我樂界頑迷にして獨逸樂風萬能主義を取り従つて獨逸樂家の跳梁甚しきを快からず思ひ居る矢先き此程郷國のシュレーザー氏より歐州の音樂大家カルソー氏に比すべきボンケー、ルチア氏と供にミラノ、スカラ座に於てプチニー氏の近作に係るフランキユラ、デリベスを演じ呉れ間じくやとの交渉を受けたるより旁々遂に歸國の意を決したるなるべしと²⁹⁾ (『東京日日新聞』1912年6月16日)

この6月16日付けの東京日日新聞では、サルコリの帰国理由が、ミラノスカラ座で〈西部の娘〉の演奏依頼を受けた事とある。また、サルコリの帰国理由の1つに、日本音樂界の「獨逸樂風萬能主義」が推測されているのが興味深い。「ドイツ系対イタリア系」に関しては、『音楽界』の1912年7月号にも「サルコリー氏とマイステル氏と伊太利と獨逸の歌劇で喧嘩をした事さへ有之候。」との記述もある³⁰⁾。いずれにしても、サルコリの帰国が日本にとって損失であり、惜しまれていることが書かれている。

サルコリのイタリアへの帰国に関連して、6月19日の東京日日新聞には「サ氏最後の演奏³¹⁾」とのタイトルで「伊太利聲樂家サルコリー氏が突然歸國する事となりしは既記の如くなるが來る二十三日午後八時より神田青年會館に於て開催するマンドリン音樂會に最後の獨唱をなすべしと入場料は二圓、一圓の二種にして銀座松本樂器店にて發賣すと」ある (『東京日日新聞』1912年6月19日)。同じ演奏会の事は、『音楽界』の第5巻8号にも掲載されている³²⁾。東京日日新聞には、6月23日の演奏会が最後になるとしているが、6月28日の「恩師感謝音樂會」にもマンドリン合奏とテノール独唱で出演していたようである³³⁾。

これら帰国に関する記事からしばらく、日本の新聞や雑誌にサルコリの記述は見られない。その後、同年11月5日付け讀賣新聞に、にサルコリの記事が掲載された。記事は「音楽界消息」欄にあり、「サルコリイ氏 原信子を伴ひて上海に赴きたる伊太利聲樂家サルコリイ氏は■地に於て非常の好評を博し、従つて招聘契約を延長したれば、來る廿五日迄上海に止まり■■より再び來朝すべしと³⁴⁾」とある

(『読売新聞』1912年11月5日)。このことから、1912年11月には原信子と上海に滞在しており、その後日本に戻ることを予定していたことが分かる。『音楽界』にも、「サルコリー氏」のタイトルで「上海にて非常の好評を博したる伊國聲樂家サルコリー氏は十一月十三日夜再び來京したれば近々盛なる一大音樂會を催されるべし²⁴⁾」との記事が見られた(『音楽界』1912.12:66)。

3 おわりに

日本におけるサルコリー関連の資料うち、1911年と1912年のものを追った。調査対象とした年は2年に渡っているが、サルコリーが来日したのは1911年秋で、その後1912年7月から11月まで日本を離れている事を鑑みると、サルコリー

の日本滞在期間はほぼ1年である。サルコリーは、滞在が短いながらも、来日から一年間に渡って日本の新聞や雑誌に多く取り上げられていたことが分かった。また、資料を順に追う事により、来日直後には「二流の人²¹⁾」と称されたサルコリーの記述が数ヶ月の滞在や音楽活動を経た後には「是まで世界一といふ冠詞を冠ぶつたくせ喰せ者が随分やつて來た。けれども、ザルコリーだけは喰せ者ではないらしい。²²⁾」やサルコリーの離日に関して「好樂家は非常に之を惜み目下極力氏に歸國を断念せしめんと運動中なるか既に氏の決意堅く到底意を翻へさざるべし²³⁾」とされている事から、サルコリーが当時の日本に必要とされ、受け入れられていたことが浮かび上がって來た。今後も引き続き、アドルフォ・サルコリーに関する調査研究を重ねていく。

参考文献

- (1) 『東京日日新聞』1911「伊太利音樂家の試演」。11月25日付、4面。
- (2) 『東京日日新聞』1911「帝劇の女優」。12月31日付、3面。
- (3) 『東京日日新聞』1911「帝劇の伊太利歌劇」。12月2日付、4面。
- (4) 『東京日日新聞』1911「演芸▲帝劇」。12月11日付、4面。
- (5) 『東京日日新聞』1911「演芸▲帝劇の女優劇」。12月14日付、4面。
- (6) 『東京日日新聞』1911「演藝▲帝劇」。12月19日付、4面。
- (7) 『東京日日新聞』1911。12月19日付、4面。
- (8) 『東京日日新聞』1911「遊覧案内」。12月30日付、31日付、各3面。
- (9) 『十二月狂言絵本筋書 帝國劇場』1911。(帝國劇場)。
- (10) 妹尾幸陽1912「内外彙報：歌劇カバレリ、アルスチカナに就て」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻1号、41-43頁。
- (11) 『音楽界』1912「東京フィールハルモニエ会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻1号、52-53頁。
- (12) 乙骨三郎 1912「四十四年の音楽界」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻2号、64-65頁。
- (13) 『音楽界』1912「帝劇とザルコリー氏」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻2号、77-78頁。
- (14) 丸山徳子 1999 (インタビュー)。
- (15) 『音楽界』1912「アドルフ・サルコリー氏」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻3号、巻頭。
- (16) 『音楽界』1912『歌劇「カバレリアルスチカナ」と「熊野」』。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻3号、巻頭
- (17) 『音楽界』1912「サ氏と演奏」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻3号、58-59頁。
- (18) 『音楽界』1912「サ氏の楽声教授」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻3号、59頁。
- (19) 『値段史年表』1988。(朝日新聞社)、1988年6月30日、567、116頁。
- (20) 『音楽界』1912「サルコリー氏絵葉書」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻3号、61頁。
- (21) 立見坊 1912「聞いた風」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻4号、57頁。
- (22) 『音楽界』1912「歌劇声楽大音楽会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻4号、67頁。
- (23) 『音楽界』1912「ザルコリー氏の帝劇出演」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻4号、72頁。
- (24) 『音楽界』1912「松本楽器合資会社広告」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻5号、巻頭。
- (25) 『音楽界』1912「声楽音楽会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻5号、48-49頁。
- (26) 『音楽界』1912「東京連合和洋音楽演奏大会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻6号、63頁。
- (27) 『音楽界』1912「帝劇事情」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻6号、68-69頁。
- (28) 『東京日日新聞』1912「聲樂家サルコリー氏去らん」。6月16日付、4面。
- (29) 樂道居士1912「神戸より」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻7号、53頁。
- (30) 『東京日日新聞』1912「サ氏最後の演奏」。『東京日日新聞』6月19日付、4面。
- (31) 『音楽界』1912「マンドリン音楽会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻8号、64頁。
- (32) 『音楽界』1912「恩師謝恩音楽会」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻7号、69頁。
- (33) 『読売新聞』1912「サルコリー氏」。『読売新聞』11月5日付、3面。
- (34) 『音楽界』1912「サルコリー氏」。『音楽界』(音楽教育会)、第5巻12号、66頁。